
テディベア

クラウディア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テディベア

【Nコード】

N8716A

【作者名】

クラウディア

【あらすじ】

蘭はある日、コナンに來たメールを見てしまう、それは灰原からのメールで、蘭は衝撃の事実？を知る。その事を知ったコナンと灰原がとることになってしまった行動とは・・・

第1話 俺の秘密

ここはとある探偵事務所・・・

そこで蘭はいつものように新一の事を考えて窓をボーッと眺めいた。

(雨・・・新一の所はどうなんだろう)

時刻は午後8時半

このリビングには今、蘭しかない。小五郎は泊りがけで依頼人の家に行っている。コナンはさっきお風呂に入っていた。

「ガタガタガタ」その時、何かが動く音がした。蘭は一瞬ビクッとしたが、その正体が携帯だとすぐにわかった。

どうやらコナンの携帯らしいたぶんマナーモードにしているのだろう。

蘭はコナンの携帯を手を取った。

(どうしよう・・・中見たほうがいいかな、緊急の用だったら困るし・・・でもコナン君嫌がるかも、

でもでも、あの子よく変な事件にまきこまれてるし、人の命とかかかってたら・・・それにもしコナン君が・・・)

蘭の頭の中で色々な考えが渦をまく。

(よし、いいよね)

蘭は、思い切って携帯を開けてみた。画面には『メール一件受信』と書いてあった。どうやら灰原からのメールみたいだ。そして蘭は内容を読んだみた。

そして、その内容は、『そうね。私も好きよ』

(こっ、これって／／／・・・まさかね・・・) 蘭の頭の中に一つの考えが浮かんできてしまった。

蘭は首を振って忘れようとしたが、どうしてもその考えが頭をよぎ

る。

いけない事だと知りながら、確かめたい気持ちが大きすぎ、つい指が動いてしまう。

（えーっと、一番最近の送信メールは・・・あった!...えっ、これってやっぱり・・・）

そこにはこう書いてあった。『俺はあいの事好きだよ。お前は どう思ってるんだ?』

「ガチャ」その時タイミング悪く、なんとコナンが部屋に入ってきてしまった。

第1話 俺の秘密（後書き）

どうでしたでしょうか？初めての作品なのでうまくできてるか心配です。この小説は、昔、私が書いた小説を家で見つけたので出してみました。

楽しんで読んでほしいです。

第2話 勘違い

「あーっ、僕の携帯！」

コナンはすぐさま蘭のもとへ来て携帯を取り返した。

「みつ見た、中身……」コナンはかなり慌てている。

「ごっ、ごめん……」

蘭は今になって少し後悔した。でもコナンの後悔は少しどころではない。

（くっそう、なんで今日はダイヤルロックもせずここに忘れちゃったんだよ……つまり、俺の正体が工藤新一だって事がバレちゃったんだよな……」

コナンは眼鏡をはずし目線を床から蘭に移した。「いつかは、バレると思ってたんだ……俺の正体の事……」

「えっ？正体って何のこと？」

「いやだから、俺の正体の……違うのか？」コナンからさっきまでの真剣な顔が消えた。

「私はコナン君が哀ちゃんにした告白の事を言ってるんだけど……」

「こっ告白？」

「違うの？じゃあ正体って……」

そこでやっとコナンは自分の勘違いに気づいた。

「あーっ実はそうなんだ。あはハハハハハ……」コナンはこの場をしのごとく必死になっていた。

「そっかーやっぱり。哀ちゃんの返事OKだったよ」

蘭すぐくうれしそうにしている。さっきまでの後悔はどこへいったのやら。

「あっ、そうだこれ」蘭はポケットからなにやら取り出し、コナンの前に差し出した。

「映画のチケット？」

「そう。本当は、私と園子で行こうと思ってたんだけど、テスト前で行けそうにないから、コナン君にあげる。哀ちゃんと一緒に行ってきたらいいよ」

「・・・ありがとう」

「じゃあ、私もう寝るからがんばってコナン君！」

そう言い、蘭は自分の部屋へ入っていった。

「はぁ」コナンは胸を撫で下ろした。

（今回は本当に正体がバレたかと思ったぜ、まっ、でも俺の早とちりでよかったな・・・んっ？ちよつと待てよ・・・）

『コナン君が哀ちゃんにした告白・・・』

（って、どうして俺が灰原に告白した事になってんだよー！）

第2話 勘違い（後書き）

第2話どうでしたか？ んゝ話が進んだような、進んでないような・・。

この小説たぶんまだまだ続きます。

第3話 真実

『コナン君が哀ちゃんにした告白・・・』

（おいおい、俺、告白なんかしてねーぞ・・・どうなってんだ・・・たしか最近したメールは・・・）

コ..『なあ、さっきあった探偵達のストーリー見たか？』

哀..『ええ、博士がいつも見てたから。それがどうかしたの？』

コ..『実は見たかったんだけど小五郎のおっちゃんが違う番組見えて見れなかったんだよ』

哀..『それで私に内容を教えろって事ね』

コ..『ああ、犯人だけでいいからさ』

哀..『犯人はたしかあいつという人よ』

コ..『やっぱりそうか、1番あやしいと思ってた』

哀..『雰囲気からしてそうだったもの。残酷な人よね』

コ..『そうか？俺はあいの事好きだよ。おまえはどうなんだ？』

（もしかして、これか・・・）

哀..『私も好きよ』

回想終了

コナンは手に持っている二枚のチケットを見た。

（何か変な事になっちまったな・・・でも今更あんなにうれしそうにしている蘭に誤解だなんて言えねーし・・・まっこのままでもいいか・・・正体がバレなかったただけ幸運だよな）

次の日

キーンコーンカーンコーン×2

「コナン君、早く帰ろう」歩美がコナンを呼ぶ。

コナンはふと朝の蘭の言葉を思い出した。

『コナン君。ちゃんと哀ちゃんをデートに誘うのよ。せっかく私がチケットあげたんだから』

「あっ悪い、歩美ちゃん。みんなに先に帰つていってくれて言つていてくれ。俺、灰原と話があるから」

コナンがそう言うと言歩美は寂しそうに廊下を走っていった。

そして教室はコナンと哀の二人だけになった。

第3話 真実（後書き）

ふうやつと3話って感じです。自分的にはなかなかよかったかなと思います。次回はやつと哀ちゃん登場です。

はっ！

コ×哀なのに哀ちゃんがあんまりでてきてない！

まっ、いっか・・・

第4話 二人の秘密

そして教室はコナンと哀の二人だけになった。

「でっ、何なの話って解毒剤なら出来てないわよ」

「これ」

コナンがチケットを渡すと灰原は不思議そうにいった。

「映画のチケット？ 吉田さん達は何も言っていなかったけど・・・」

コナンは窓の外を見て言った。

「あいつらは行かぬーんだ」

「用事があるんだったら他の日にすればいいじゃない。金、土、日、有効みたいだし」

「いや、そうじゃなくて、2枚しかないんだ・・・」

「だったら吉田さんを誘えばいいでしょ」

灰原がなかなかわかってくれないのでコナンは少しキレてしまった。
「あっーもう、お前じゃなきゃ駄目なんだよ！ つまり二人でデートに行こうって言って・・・」

コナンはそこまで言ったところで、やっと自分が何を言っているのか気がついた。

「デート？・・・」

灰原はすごく驚いている。自分がこんなことを言われるなんて思いもしなかったのだろう。

「あっ、いや、デートとかじゃなくて、たまには二人で映画でも見るのもいいかなーと・・・」

コナンは少し赤くなって言った。そんなコナンにたいして哀は・・・

「あなた頭でも打ったんじゃないの？・・・」

一瞬教室が静かになった 本当は一瞬だが・・・

「（ムカツ）あのなあ、人がせつかくデートに誘ってやってるのに何だよその言い種は！」

ややキレぎみのコナンに対して灰原は冷静に答える。

「あら、やっぱりデートなんじゃない・・・」

「あっ・・・」

「いいわよ。家にいても退屈だしね。どうせ工藤君の事だから訳有りなんでしょ」

灰原は最後に意味深な笑顔を残していった。

第4話 二人の秘密（後書き）

やっと哀ちゃん登場！さてこれからどうなっていくのでしょうか？（いや、あんまりどうもならないのですが・・・）
次回は博士も出てきますよ。読んでやってください。

第5話 報告

こうして二人は日曜日映画に行くことになった。

「ただいまー」

コナンが学校から帰ってくると、3階から誰かが降りてきた。

「コナン君どうだった?！」それは蘭だった。

「えっ、何が?」

「きまつてるじゃない。哀ちゃん、誘ったんでしょ!」
とぼけてはみたが、やっぱり予想どうりの質問だった。

(まったく、好きだよなー女ってこういう話・・・)

「あっ、うん。うまくいったよ」

「そっかーよかった。そうだと日曜は私もお父さんも家に居ないから
昼食は哀ちゃんと一緒にどこかで食べてきて」

蘭がいつにも増して楽しそうなのはコナンにもよくわかった。

「うん・・・そうするよ。蘭姉ちゃん・・・」コナンはただ頷くだけであった。

土曜日

この日は、哀の話でもちきりだった。

「ねえ、ねえ、コナン君これなんかどう? あっ、でもこっちの方がいいかな?」

蘭は雑誌をめくりコナンに話かけてくる。

「ねえ、コナン君聞いている?」

蘭がぼーっとしているコナンの顔を覗きこんだ。

「うっ、うん。聞いているよ」

「コナン君はどっちがいいと思う？」

蘭が指指した雑誌、そこには・・・

「ねえ、どっち？『仮面ヤイバーおもちゃ携帯』か、『ゆりかちゃん人形』！」

（勘弁してくれよ・・・）

「私はやっぱり、ゆりかちゃん人形がいいと思うな。やっぱり女の子だし」

「いいよ。プレゼントなんて・・・」

「そんなことじゃ駄目よ。絶対喜ぶから！コナン君だって哀ちゃんがこれあげて喜んでくれたらうれしいでしょ？」

「・・・」

（灰原がこれをあげて喜ぶ？）

コナンはちよつと想像してみた。

「灰原これ、気に入ってくれるといいけど・・・」

コナンは公園のベンチに座る灰原にプレゼントを渡す。

「こっこれ、ゆりかちゃん人形じゃない！私、前からずっとほしいと思ってたのよ」現実のコナンの顔が青ざめてくる。

「そうだわ。今から家に来て一緒にお人形遊びしましょう。推理なんかよりずっと楽しいわよ」

「灰原がそう言うなら、今から博士の家でも行くか」そこで灰原はコナンの手を取った。

「本当にありがとう工藤君。一生の宝物にするわ・・・」

コナンの想像終了。

「わぁーーーーー！！！」

コナンは悲鳴をあげた。

「いつ、嫌だ。そんな灰原。灰原がゆりかちゃん人形を喜ぶなんて、そんな灰原じゃない……。でも、もし灰原が喜んだら俺は、俺は・・・」

「わぁーーーーっ!」

がばっ

気がついたらコナンは、布団の中に居た。

目覚ましを見ると午前7時・・・

「夢?・・・だとしたら蘭に俺の携帯を見られたのも夢だったらいいのに・・・」

後で蘭に聞いてみたら、やっぱり、そこまで夢にはなっていなかった。

第5話 報告（後書き）

話がぜんぜん進んでないですね。次もあんまり進まないかも・・・。
本当はこの場面なかったんだけど、話を区切るときにどうしても字
数がたりなくて、急遽作ったんですけど、どうでしょうかね・・・。

第6話 阿笠邸

日曜日、阿笠邸にて

「博士、今日、私お昼いないから、自分で何か作って食べといてちようだい」

哀は小学生に似つかわしくない雑誌をめくっていた。

「どこかに出かけるのか？」

博士はソファでコーヒーを飲んでいた。

「ええ、工藤君と映画に行くの」

「みんなも一緒なんじゃろう。だったらわしに言ってくれれば送って行くのにのう」

博士は自分に今までなにも言ってくれなかったと思って少し寂しそうにしている。

「遠慮しとくわ。工藤君、私とデートがしたいらしいから」

灰原が『デート』と言う言葉を出したとたん博士はマグカップを置いて勢いよく立ち上がった。

「なっ、なんじゃと！うっゴホゴホ」

「だいじようぶ！博士！」

哀はすぐ博士のもとへ駆けつけた。

「あっああ、もう大丈夫じゃ、それで2人がデートすると言うのは、どういふことなんじゃ・・・」

博士はどうしてもその事が気になるらしい。

「えっ？あれ冗談よ。工藤君と出かけるのは本当だけど・・・」

哀はとっさに嘘をついた。博士に心配させる訳にはいけないからだ。

「なんじゃ冗談か、哀君は冗談がきついのはのう」

博士は胸を撫で下ろした。

それからしばらくして・・・

「あつ、そうじゃ哀君に渡したいものがあるんじや」

そう言い博士は何やら棚を除き始めた。

「おお、あつた、これじゃ、哀君に似合うと思つてのう」

博士は青い紙袋を哀に渡すと、哀は中の物を取り出してみた。

「これ、私のために・・・」

第7話 博士

「これ、私のために・・・」

中から取り出したのは赤いワンピースとそれに似合う淡いピンク色のカーディガン。

「さっそく着てみるというじゃろう」

「ええ、そうするわ」哀は洗面所へ向かった・・・が途中で足を止めて博士の方に振り返った。

「なんじゃ？ 値札なら取ってあるぞ」

哀は博士の言葉にクスッと笑って、恥ずかしそうに、それでいて優しい声で言った。

「ありがとう・・・博士・・・」

博士は今胸いっぱい幸せを感じていた。

そして待つ事5分・・・

うきうきしながら待つ博士のもとに哀が現れた。

そのワンピースは哀にすごくよく合っていて、いつもの哀とは違う雰囲気になっていた。

「わしの思ったとおりじゃ。すごく似合っておる」

「そう？」

哀は鏡の前に立った。

哀は正直、自分には絶対似合うは訳がないと思っていた。

しかし、いざ鏡に映った自分を見てみると、自分がまるで別人に見えて、案外似合っているように思える。

まあ、哀にとっては似合っているかは別として、自分のために博士が思っ買ってくれたこの服を着られるだけでうれしかった。

その時、時計に目をやると「11時50分」だった。

「博士、じゃあ私行ってくるから」

哀は博士に見送られ阿笠邸を出た。

（後10分しかないわ・・・少し遅れるかしら）

哀はそう思ったが、急ぐこともなくいつものペースで歩いていった。
哀の事を待っているであろう、ある男の子の事を思って・・・

（まだかよーあいつもしかして来ないんじゃない・・・）

コナンは時計を見ながらため息をついた。

第7話 博士（後書き）

第7話です。また博士が出てきましたね。本当は博士は5話の時から出そうと思って、第4話の時、次話に博士が出るって書いてあったのに第5話で出せなかったんですね。ごめんなさい。いよいよ次は哀ちゃんとコナン君がデートします。次も読んでくださいね。

第8話 喫茶店

哀がコナンの前に姿を現したのは、約束の時間から5分後だった。コナンは腕時計とにらめっこしている。

「工藤君、お待たせ」

「灰原、もう5分も・・・」哀が声をかけるとコナンはたった5分待った文句を言ってやろうと思っていた。灰原の姿を見るまでは・

・
「お前、どうしたんだ・・・その服・・・」

コナンはいつもと違う灰原に5分待たされた恨みなど頭から掻き消された。

「博士が買ってくれたのよ。着てあげないと可哀想でしょ」

（すっげえ、かわいい・・・）

いつもと雰囲気が変わっていたのと、すごく可愛かったのでコナンは灰原に少し見とれていた。

自分から目線をはずそうとしないコナンに灰原が言った。

「工藤君、どうかしたの？」

「あっ、別に・・・何でもねーよ」

口ではそうは言ったものの、コナンの顔は少し赤くなっていた。

コナンはそれを隠すのと、恥ずかしさで俯いて立ち上がった。

「さっ、行くぞ・・・」

「ええ」

二人が向かった先はある喫茶店。

二人はドアに付いてる鈴の音と共に中に入った。

中はけして広くはなかった。お昼時だというのにお客もコナンたち以外におじいさん一人だけ。でも、オシャレでアンティークな店である。

そして食事をしながら話す事10分・・・

「つまり、工藤君は彼女に私と貴方ができてるって誤解されたのに、なかなか本当の事を言えない・・・そういうことでしょ？」

コナンは蘭とあったメールの事件を灰原に話した。

「ああ、でも蘭に正体がバレなかったただけでも幸運だろ？」

「たしかにバレなかったのはよかったけど、私の気持ちも少しは考えてくれないかしら・・・」

灰原はコナンにジト目を送る。

第9話 意見

「たしかにバレなかったのはよかったけど、私の気持ちも少しは考えてくれないかしら・・・」

哀はコナンにジト目を送った。

「まあ、そう言うなよ。お前が俺の事を好きだって勝手に決めたのは悪かったと思ってるよ。元の姿に戻って蘭に本当の事を話したら、ちゃんと誤解は解くからよ」

哀はため息を吐いた。

「あのねえ、元に戻ってからじゃ遅いでしょ」

「えっ、なんでだよ？ 蘭は他人にべらべらそういう事を話すやつじゃないし、蘭がそう思ってたってべつに、そんなに困ることはないと思うけど・・・まあ、お前が俺と然ういうふうにどうしても見られたくないって言うなら話はべつだけど・・・」

灰原またため息をついた。

コナンにはどうして灰原がそういう反応をするのかが判らないらしい。

「私は別にいいのよ。例えば私と貴方が恋人だって噂になったとしてもね。だけど彼女は違うわ。もし

彼女が貴方の正体を知って、私と貴方が両思いつて事になれば、私は彼女にどんな顔をして会えばいいの？ 彼女だって、工藤君が彼女以外の人と付き合ってるって知ったら傷つくでしょ・・・」

灰原がそこまで言ってやっと灰原が言いたいことがわかった。

そして、さっきの自分が言った事を後悔した。

「悪い・・・灰原・・・俺、自分の事しか考えてなかった・・・明

日、蘭に話すよ……」

コナンの態度を見て、灰原も自分がいった事を後悔した。

「ごめんなさい……いいすぎたわ。だからそんなに急がなくてもいいから……元に戻る前に話せばいい訳だし……それに……嫌じゃないわ……」

これが彼女にとっての自分の気持ちを現す精一杯の言葉。でも、コナンには灰原の気持ちが十分伝わった。

「灰原……」

二人の間に沈黙の時間が流れた

まるで時間が止まったみたいだ

『ゴーンゴーン』上に掛かっていた柱時計が鳴った

そして二人は店を後にした。

第9話 意見（後書き）

私的に、ここは一番気に入ってるシーンです。ちょっと話のストーリーが変になってるけど、他に思いつかなかったの。さてさて、このお話も後3話くらいでおわりかな。早いものですね。

最終話 テディベア

映画の内容

ある二人の男女が原因不明の病気によって体が幼児化してしまう。

男の方は私立探偵で名前はジャック

女の方は科学者で国の重大な秘密を知ってしまい命を狙われている。

名前はミシエル

そして映画は上映された

（こっこれって俺と灰原みたい・・・）

（まるで私と工藤君みたい・・・）

二人は顔を見合わせた。

映画は進みいよいよクライマックス！ミシエルは誘拐され銃口を突きつけられた。

その時コナンの手に何かが重なった。・・・それは哀の手だった。

「灰原・・・」

コナンは哀の手をもう一度しっかりと握りなおし、哀の耳元で囁いた。

「たまには、こういうのも悪くないだろ」

その時灰原がどういう顔をしたのかは、暗くてコナンにはよくわからなかった。

映画はあの後、ジャックがミシエルを助けだし二人は結婚し、ハッピーエンドだった。

今二人はというと、コナンが灰原を家まで送っている途中で信号待ちをしている。

ふと哀は後ろにある雑貨屋のショーウィンドーに飾ってあるテディベアに目がいった。

茶色い毛で首にリボンがしてあり、かわいくてオシャレなベアである。

哀はただそれをぼっーと眺めていた。

「おい、灰原渡るぞ」

信号が青になってもぜんぜん気づかない哀にみかねたコナンが声をかけた。

「あつ、ごめんなさい」

それから二人が5分ほど歩くと辺りは人気のない住宅街に入っていた。

コナンも灰原もただ黙って歩いていた。もう家は近い。

「あのさ、灰原・・・」

その時コナンが急に足を止めたかと思うと

「俺ちょっと忘れ物取りにいつてくる。すぐ戻ってくるから絶対待ってけよ！」

そう言いコナンはもと来た道を走りだした。

「ちよつと、工藤君」

「はぁ〜」あれから10分・・・

灰原はコナンの考えに疑問を持ちながらも、コナンの事を考えて待っていた。辺りはもうすっかり夕方になっている。

「悪い、灰原、遅くなってハァハァ・・・」

その時になってようやくコナンが姿を現した。

「はい、これやる・・・」

コナンから差し出されたのは白くてピンクのリボンが巻かれた箱。

デートしてる最中はもちろんこんな物もっていなかった。

哀がその箱を受け取るとコナンは「後はもう一人で帰れるだろ、じゃあな」そう言ってまた走っていつてしまった。

哀はその場に一人取り残された。

（何考えてるのかしら・・・）

哀がリボンを解き箱を開けると中には哀が信号待ちの時に見ていた・

・

テディベア

「くどう・・・君・・・」

ともう一つ

（手紙？）

そこにはこう書いてあった。

『今日は楽しかったぜ。それとおまえ可愛かった。実をいうとまともなデートは俺これが始めてだったんだ。蘭と出かけた時はかならず事件がおこってそれどころじゃなかったし、まっ、経験豊富なおまえは初めてな訳なかったと思うけど、俺にとっては特別な日だったって事が言いたかったただけだ。でも以外だったな、おまえがテディベア好きなんて、それ大事にしろよ』

「ありがとう、工藤君・・・」

哀は頬を赤く染めて言った。

でも別にテディベアが好きな訳じゃないのよ。あの時見てた理由は・

・

優しい顔だちに何でも見透かしたような瞳・・・まるでどこかの名探偵さんみたい。

でもこれは私だけの秘密・・・

あの映画の二人はハッピーエンドだったけど、
私たちがそうなるかはわからない。・・・でも、今日だけはハッピーエンドね。

最終話 テディベア（後書き）

テディベア連載終了です。今まであきずに読んでくださったみなさまありがとうございます。もっとこの話は分けるつもりだったんだけど、だるくなったので1つに入れました。10話で切がいいですしね。この話はほのぼのの系でしたが次はちよつと違った感じのお話を書けたらいいなーっと思います。でもコ×哀な事はたしかだと思います。新蘭と書けないので・・・ではまた次の連載でお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8716a/>

テディベア

2010年10月10日13時10分発行